EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

EDO-TOMO
えど友

No.65
2012
（平成 24 年）
1－2

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集　**「たつ年に、辰・龍(竜)をめぐって」**……1～3
新年祝辞　**江戸博竹内館長／友の会松原会長** ……3
友の会セミナー**「江戸の遊興」**……4
友の会セミナー**「江戸衣装」**……5
見学会（バスツアー）**「富岡製糸場および周辺見学」**……6
江戸博クリップ**「ベランダの愉しみ」**……6
見学会**「広重『名所江戸百景』周辺探訪ーその５ー」**……7
えど友サークルだより / 会議・会合日誌……8
えど友プラザ　**今に生きる町火消** ……9
斗南藩の人々 ……9
落語で江戸散歩…㉔［王子の狐］……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

新春特集

たつ年に、辰・龍(竜)をめぐって

―江戸博・橋本由起子学芸員に聞く―

明けましておめでとうございます。今年の干支（えと）は「たつ」ですが、たつというと辰・龍(竜)という文字が浮かんできます。これらの文字にはどういう意味が込められているのでしょうか。昨年 12 月３日から開催中［1 月 29 日(日)まで］の企画展「歴史の中の龍」を担当された江戸博学芸員の橋本由起子さんに、辰や龍にまつわるお話をうかがいました。たつをテーマにこんなに多岐にわたる話題があり、日本人とたつとは深い関わりがあるのだなと感じました。

出席者：橋本由起子学芸員
参加者：松原良（友の会会長）
西村英夫（事業部会）
寺田萬企代（総務部会）
司　会：中村貞子（広報部会）

十二支の中の「龍」、龍の力、粋な龍

中村　今年平成 24 年(2012)は辰年ということで、その辰にちなみ「歴史の中の龍」という企画展が開催中ですが、まず展示内容についてお聞かせください。

橋本　館蔵の約 40 点を展示します。展示構成は三つの章立てです。第 1 章は「十二支のなかの『龍』」です。平成 24 年は辰年ですが、「辰」という文字は想像上の生きものである「りゅう(龍、竜)」を表すわけではありません。十二支に十二種の動物をあてがった十二禽獣（きんじゅう）では、「辰」には「龍（竜）」があてられますが、「辰」は順序を表す文字（記号）である十二支の第五番目であるということを表します。そもそも十二支は方位や時刻を示し、「十干（じっかん）」と組み合わせて年・月・日などを表します。第 1 章ではその辺を紹介します。第 2 章は「龍の力」です。龍は雲を起こして雨を降らすなど霊力の強いものとして日本や中国、東南アジアなどでは、神格化されています。火事装束など切迫した環境の中で力が欲しいという時の装いや道具には龍の意匠が使われています。武具にも使われました。かぶとの前立てとか弽（ゆがけ）（弓を射る際に用いる革製の手袋）にも龍の意匠が施されたものがあります。ちなみに皆さんによく知られたものに「龍角散」という薬があります。龍角散の名前はもともと配合されていた生薬名に由来していますが、名前に「龍」を使った薬は他にもあります。特別な力を持っているというイメージをつくる上でも、「龍」という文字が名称に使われたのかもしれません。第 3 章は「粋な龍」です。龍は特別なものにだけでなく身近な装飾品の意匠としても使われました。たとえば、煙草入れ、根付、櫛（くし）、笄（こうがい）などにも使われています。今回は龍の意匠がほどこされた館蔵の美しい品々を紹介します。

▲橋本由起子学芸員

中村　館蔵品はふだんは展示されているのですか。

橋本　龍だけに着目して展示することはあまりありません。今回まとまってご覧いただけるよい機会になるかと思います。

十二支と動物

橋本　さて、皆さん、干支というと動物を想像されますよね。

松原　はい、普通はそう思います。

橋本　もともとの「干支」の意味は違います。その話をする前に、まず十二支の話をします。十二支は方角や時刻を示します。方位でいう辰は東東南ですが、東南を意味する辰巳＝深川など方角をあらわす言葉と地名が結びつき一般化したものもあります。

西村　辰巳芸者も方角を表しているんですね。

橋本　そうです。出品資料に「見立十二支　辰　深川八幡富士」という錦絵がありますが、富岡八幡宮の別当・永代寺の庭にあった富士塚と麦わらのヘビを持った辰巳芸者が描かれ、絵全体で辰巳を表しています。一方、江戸時代には十二支を十二禽獣で表している刷り物もあります。たとえば、十二禽獣のそれぞれを江戸の職人になぞらえて描いた錦絵があります。このなかで辰は龍の姿で描かれています。ちなみに龍の職は玉師（藍玉師）です。龍の顎の下に珠があるということにかこつけてのことだと思います。

龍のイメージ

西村　僕なんか龍というと中国の皇帝を思い浮かべます。あと、禅寺の天井の絵や日光の鳴き龍、凧の龍の絵など、男としてはイメージしますね。

中村　龍は中国から来たものですよね。

松原　「龍虎相搏つ」の虎の方は実在しますよね。龍の相手に東洋では一番強い動物だからでしょうかね。

橋本　まさに「龍虎相搏つ」の意匠の刺子半纏も展示します。龍とは何なのか、『本草綱目』によると龍は9種類の動物に似た特徴があるといいます。頭は駱駝、角は鹿、眼は兎、耳は牛、項は蛇、腹は蜃、鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎です。この中の蜃も想像上の生きもので、蜃気楼を起こすといわれています。『北斎漫画』ではこのようにほぼ龍に近い姿で描かれています。また龍は卵で生まれるといいます。龍は1度につき二つの卵を産みますが、自ら温めて孵すわけではなく遠くにいても意思の力で孵します。二つの卵のうち一つは龍、一つは「吉弔」になるといわれています。この他、想像上の生きものといいながらも龍にはさまざまな種類があります。「蛟竜」、翼のある「応竜」、「雨竜」（トカゲに似ている）、「だ竜」、「虬竜」、……、『本草綱目』では、ほかにトカゲ、イモリ、ヤモリなども「竜類」に数えています。

▲西村英夫さん

西村　もともと中国で想像上の動物としてできたものですか。十二支そのものが中国ですよね。それがたとえばベトナムや南の方ではワニがいるからワニっぽくなったりとか、日本に来てまた変形したとか、そういうのをちょっと感じます。

橋本　「干支」は、中国やアジアの漢字文化圏で使われていますが、たとえば「亥」は中国では猪（ブタ）だったりします。より自分の国にいる近いものがあてられているようですね。

西村　それから鯉が滝登りして龍に変わるという話がありますね、龍の鱗がコイの鱗に似ているというように、ワニのいる所はワニに似ているなど、龍もそういう歴史で、日本ではこういうふうに受け入れられたのでしょうね。

干支は幹と枝、今年は壬辰

▲中村貞子さん

中村　十干のことですが、いつ頃入ってきたのですか。

橋本　中国では殷の時代の甲骨文に六十干支表が残されています。干支は幹と枝の関係で、十干も十二支も植物が成長していく様を表しているといいます。西洋ではひと月を4分割して1週間＝7日をサイクルとしますが、中国では3分割して、10日（旬）を1区切りとする考え方が使われていました。今も初旬・中旬・下旬といいますね。甲骨文では「卜旬」と言って、ある日から10日先までの吉兆を占ったものがあります。「十干」はその10日の順序符号です。同じ頃に十二月の呼び名として十二支も考え出されました。この「十干」と「十二支」を組み合わせて年や月・日を表したのが「干支」ですが、十干と十二支を単純に組み合わせると120通りになるはずです。しかし長過ぎるので、十干を「甲・乙」「丙・丁」「戊・己」「庚・辛」「壬・癸」と二つずつ組み合わせて5組つくり、それと組み合わせる十二支は、その1組のうちの一方と組めばもう一方とは組めないというように組み合わせを限定します。そうすると5×12で60の組み合わせができます。還暦とはこの六十干支を一巡したという意味です。さらに戦国時代には陰陽五行説と結びつき、それぞれの組み合わせに木火土金水を当て、奇数番を剛日、偶数番を柔日としました。日本ではこれに剛（陽）を兄、柔（陰）を弟として「えと」としました。（「甲・乙」「丙・丁」「戊・己」「庚・辛」「壬・癸」）と、つまり「えと」は、もともとは「十干」の呼称に由来しているのです。ちなみに今年は「壬辰」、来年は「癸巳」です。

松原　中大兄皇子の「兄」も「え」と読みますね。

西村　「丙午」というようなものが、中国ではありますか。

橋本　たとえば辛酉の年は革命が起こりやすいとか、「庚申」の日には「三尸」が人の体内から出て来るとかありますが、起源が中国にあってもそれぞれの国で独自の解釈が加えられる例もあります。

龍神、龍宮……とドラゴン

橋本　十二支と十二禽獣がいつから結びついたかは、明らかになってはいませんが、農民に暦を教えるために身近な動物で説明したとの説もあります。「神田明神祭礼図巻」に通新石町（現在の千代田区内神田三丁目、鍛治町二丁目）が十二支の行列をおこなったとあります。これは別に動物に仮装しているわけではありません。羽織をつけた人が十二支それぞれの輿に乗って連なっています。この絵巻は寛政の改革で縮小される以前の祭礼の様子を描いていますが、海神の娘・豊玉姫と結婚した彦火々出見尊が龍宮から帰ると

新　年　祝　辞

江戸東京博物館　館長　　竹内　誠

明けましておめでとうございます。

本年は開館19周年。あと1年で成人式を迎えるまでに成長させていただきました。これもひとえに、友の会の皆さんの温かいご支援の賜物と感謝しております。

昨年の3.11以降、とくに「江戸の心」(共生・共助の絆）が注目され、当館の展示内容が再認識されるようになりました。また、今年の5月22日には東京スカイツリーが開業します。墨田区域を中心とする下町が大きく変貌を遂げ、当館にも国の内外から大勢のお客様が訪れてくださるものと期待しています。

今年もゆるぎない3S運営方針[(Safety) (Service) (Sense of Wonder)]に則り、いっそう発展するよう、館員一同努力する所存です。

本年もよろしくご支援・ご鞭撻のほどお願いいたしますとともに、江戸博友の会のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

新　年　祝　辞

江戸東京博物館友の会　会長　　松原　良

新年おめでとうございます。会員の皆さんにとって今年も輝かしい1年となりますようお祈りいたします。

早いもので、10周年記念事業をやったのはついこの間と思っていましたが、あれから1年以上が過ぎようとしており、友の会も今年は12年目に入ります。

昨年も江戸博のご指導・ご支援と会員の皆さんのご協力により、セミナー、見学会、古文書講座、特別観覧会などの各種事業は順調に推移し、サークル活動には多数の皆さんのご参加をいただいております。

このように会の運営は比較的安定しておりますが、12年目となる今年はさらなる発展を目指し、何か新機軸が望まれるのではないかと考えています。友の会の基本方針「会員自らが参加し創造していく会」が真の意味を持つよう、皆さんの各種事業への積極的なご参加はもちろんのこと、さらなる発展へ向けての積極的かつ建設的なご意見、ご提案を期待いたします。

ころを再現した行列も描かれています。

▲松原良さん

松原　龍宮は海の中ですが、何かイメージが重なっているんでしょうか。

橋本　浦島太郎の話は古くから同系の説話がありますが、浦島太郎がカメの恩返しで龍宮城を訪れるという設定は、室町時代に成立した『御伽草子』から定着したといわれています。ここでは龍宮は「異界」を意味しています。ただ、龍と水は関係が深く、龍の信仰には雨乞いなど農事との関係が見られます。

中村　龍の絵を襖絵によく見ますよね。あれは何か力を出すとか特別な意味があるのでしょうか。

寺田　龍安寺とか「りょう」「りゅう」という名を持ったお寺などありますね。

松原　天龍寺とかもそうですね。

寺田　池上正治さんの『龍の百科』という新潮新書をすごく面白く読みました。龍の歴史から龍が現代の生活の中でどうなってきているかが書かれていました。先ほどの「頭は駱駝で、…」などもありました。あと、中国の長江と黄河のうち黄河は黄色の龍、万里の長城は青い龍だとかもありました。

▲寺田萬企代さん

西村　今、日本で歴史上確認されている絵で一番最初に出てくる龍の絵は高松塚古墳の「青龍」ですよね。

橋本　西洋では「ドラゴン」は悪魔のイメージになっています。しかし、アジアや日本では神格化されていますね。

西村　禅宗寺院の天井などに描かれている龍の絵は魔除けだったんですね。西洋のドラゴンは悪魔で、東洋とは正反対ですね。長い伝統で受け継がれてインプットされてきたものがあって、西洋とは全然違うから西洋ではなぜ悪魔なんだ？とわからないし、西洋人にとってみれば日本では龍はなぜ魔除けなんだ？となるのでしょうね。

まだまだ龍の話は続く

橋本　これは武家用の火事装束で、女子用の頭巾です（写真参照）。

中村　この刺しゅうはすごいですね。

西村　雲龍がありますが、龍は雲を呼ぶとか、水だから昇り龍が描かれていて火事に関係あるんですね。

松原　よく言う「登竜門」という言葉は何かの世界への入口ですよね。

寺田　「登竜門」は「鯉が登れば龍になる」と書いてあるなど、「龍」についていろいろあって「画龍点睛」も。

◀武家火事装束女子用烏帽子形火事頭巾　江戸時代後期

松原　「龍頭蛇尾」などもありますね。

橋本　「龍の珠を取る」というのもあって、危険な行為をするということですね。顎の下にある珠がないと龍は天に昇れないといわれています。

中村　今年の干支について、いろいろと勉強になりました。

橋本　お正月にはこの「歴史の中の龍」をゆっくり楽しんでいただければと思います。

中村　ありがとうございました。

（追記）関連事業として‘ミュージアムトーク’(橋本学芸員による展示解説)が1月13日(金)、20日(金)午後4時から30分程度行なわれます。申し込み不要です。ぜひおでかけください。

【記録】文・写真：広報部会・内匠屋京子

第 110 回　江戸東京博物館友の会セミナー（2011/10/22）

「江戸の遊興」

講師　安藤優一郎さん（文学博士・歴史家）

毎日が縁日だった境内

江戸の町には、今でいう盛り場、あるいは歓楽街というものは、芝居町や吉原、両国橋など大きな橋の広小路以外どこにもありませんでした。江戸は７割が武家地、残り３割が町人・寺社地で、広大な武家地は無論、町人地にも遊興の場はありませんでした。では、どこに遊興地はあったのでしょうか？

江戸っ子たちはどこで遊んだのでしょう？　遊ぶということがあまりにも日常化していたため、どんなことをしていたかが分かるのは、江戸っ子たちによる記録ではなく、その当時来日し貴重な記録を残してくれた外国人によるところが大です。外国人にとってはいろんなことがものめずらしかったのでしょう。現在でも、浅草には多くの外国人がやってきますが、当時の浅草はもっとにぎやかで、もっと華やいでいたようです。浅草だけではありません、江戸の大なり小なりの寺社があのような活気を呈していたのです。つまり、江戸全体の 15%しかない寺社境内が遊興の場だったのです。そこには水茶屋があり、人を呼び寄せるための茶屋娘がいて、華やかな営業が繰りひろげられていました。浮世絵でモデルになり有名になりますと、それを見るために人が集まった、あの笠森お仙などがそうでした。また、いろいろな見世物小屋が立ち並んで、落語から、講談、物まね、軽業が見られました。特に上方からの芸人や海外からの珍しい動物はとても人気があったようです。

現在では、こうした境内には主にみやげものやお守りしかありませんが、当時は日常使う日用品が売られていてまさにショッピングセンターでした。近くのおかみさんやお母さんたちが参詣のためでなく、買物客として境内を歩いていたのです。このように人が多く集まるところに地方のお寺からご本尊を持ってきて、さらに多くの人を集めたのが出開帳でした。浅草寺をはじめ、両国の回向院、深川の永代寺などで春から夏にかけて行なわれましたが、その集まりを当てに奇抜な見世物小屋が数多く出て、集客力がさらに高まりました。飲食店をはじめたくさんの遊興ビジネスの店が潤（うるお）ったのではないでしょうか。

朝は日本橋、昼はお芝居、
夜は吉原で千両

江戸っ子が楽しんだお芝居、相撲、寄席を私は“江戸の三大娯楽産業”と考えています。高いお金を払って楽しむのではなく、気軽に安い料金で見られた、ということが大きなポイントでした。たとえば、お芝居ですが、江戸っ子は高級志向の江戸三座（中村座、森田座、市村座）は避け、いろいろな場所にあった寺社境内や広小路の芝居小屋で楽しんでいました。料金も安く、江戸三座と競う形でとても盛んでした。また、町おこしや景気回復のために歌舞伎興行など地方巡業もよくやっていたようです。

俗に、朝は日本橋（魚河岸）で千両、昼はお芝居で千両、夜は吉原で千両落ちる、と言われていますが、それに匹敵するのが相撲でしょう。多くの大名がお抱え力士を有しており、取組みの結果が賭け事の対象にもなっていたようです。両国は特に相撲が盛んでしたが、江戸の各所で奉納相撲や勧進相撲が行なわれ、これは期間限定でしたから、その時期は大変盛りあがりました。また、寄席は町内の大きな家の２階などの部屋で、昼夜行なわれていました。こうした寄席には近くの町人はもちろん、女性や下級武士も楽しんでいた、ということです。なぜこのようなことが分かっているかといいますと、天保の改革の際、江戸っ子たちは何をしているか、水野忠邦が秘かに町奉行に命じて密偵を放って調べていた記録が残っているからです。水野忠邦は当時の人からは嫌われていましたが、こうした記録を残してくれ、いまとなってはありがたい存在です。

人が集まるところ、ビジネスあり

このように、人が集まるところ遊興ビジネスありですが、これに話題性を与えたり、情報を発信させますとこのビジネスはさらに拡大します。その例として挙げられるのが大食い大会や大酒飲み大会でしょう。これはさすがに、寺社境内でやった記録はなく、場所としては料亭や宿屋で開かれました。その記録は、といいますと驚くほどで、１日中飲んでいて、今でしたら、救急車が列をなしていたことと思います。対象になるものもお酒、お菓子、おそばといろいろあり、立会人に有名人を迎え、大会に箔（はく）を付けています。おそらく、大会を開いた業者がＰＲや宣伝、ビジネスの拡大など相乗効果を狙ったものと思われますが、詳しくは分かっていません。

情報発信の例として有名な蔦（つた）屋十三郎がいます。吉原で生まれ、遊女名簿『吉原細見』を出し、出版産業を発展させた人です。浮世絵の数々を刊行した以外に江戸の料理店紹介の本を出版している業者も大勢おり、店から広告料をとり、本を見た人はその店に行く、いわゆる集客推進という仕組みがありました。このような本はめずらしかったでしょうし、きっと話題にもなり、本も売れ、料理店には多くの人が押しかけたことと想像します。

【記録】文：広報部会・福島信一
写真：同・天野哲夫

第111回 江戸東京博物館友の会セミナー（2011／11／26）

「江戸衣装～武家・商人・職人など男女の着物とその変遷を楽しむ～」

講師　菊地ひと美さん（江戸著者・画家）

今は着物の形は全部同じと思っている方も多いですが、江戸時代の着物の形はさまざまです。今日はそんな多様性の一部をご紹介します。

男編～仕事服として規定が多い

江戸時代は武家社会ですから、武家の服装は質実剛健で、裃は絹ではなく麻が正式でした。また儀礼服、礼服、公服のそれぞれが身分に応じて細かく規定されていました。上級者が登城する時は裃姿で、上下の色、柄、生地がセットになっていて、まさに現代のスーツです。当時は身分と階級がさまざまなので、着る人によって微妙な違いが規定されていました。装束で色を変える考え方は奈良時代にさかのぼりますが、廊下などで対面する際、一目でビジュアルに相手の地位がわかったと思われます。

裃は、時代とともにスタイルが変わっていきます。上下が別生地の継裃が作られると、上下が同じ生地でなくともいいようになり、袴はしわになりにくく丈夫な生地が開発され普及します。

男子で最も流行がよく現れているのは羽織です。戦国時代の陣羽織は戦場での上着でしたが、江戸時代は当初は将軍から賜る品で、後に日常着ともなり庶民に広まりました。江戸初期では、コウモリのような形の羽織や、かぶき者達が着る派手な柄の羽織が好まれました。しだいにヒキズリ羽織という裾をひきずる形が流行になります。また、羽織の胸紐の結び方を競う複雑な結びやボタン留めなど、遊ぶテクニックが考案されました。

町人の衣装もさまざまです。喜多川守貞著『守貞謾稿』にその多様性が描かれています。例えば商人は大店、中小店、物売りで衣服が異なりました。越後屋クラスの大店になると15階級にわけて生地まで決まっていました。11歳くらいの丁稚は松坂木綿格、入社9年くらいになると青梅格、さらに太織格、紬格、絹格、と上がっていきます。大店では妻や娘など女子が店に出ることは禁止されていましたが、中小店では夫婦共働きで、店と奥は一体となり階級はありません。製造をかねている店も多いので前掛け姿が圧倒的に多くなります。物売り、つまり棒手振は、ほこりっぽい関東の土の上を一日中歩き回っているわけですから、笠、着物の尻はしょり、股引というスタイルでした。

職人になると外で働く“出職”と長屋の中で仕事をする“居職”では衣服も異なります。出職は腹掛、股引、印半纏がセットです。印半纏は盆暮れにお得意様の家の印が入った半纏をもらう（仕着せ）もので、冬には何枚も重ね着していました。絵巻物『熙代勝覧』にはその様子が細かく描かれています。

女編～時代により流行が激変

女性の衣装は時代と共に激変しました。江戸初期の小袖の形は、たっぷりの身幅と小さな袖で腕が見えており、帯は細紐で結び、結び目はどこで結んでもよく、決まりはありません。政治的にも経済的にも武家社会の成長期であり、その自由な勢いが慶長小袖や寛文小袖に反映されています。慶長小袖は地無しといわれ生地を埋め尽くすように刺しゅうや金箔で覆った着物、寛文小袖は大胆なモチーフや左右非対称などアイディアあふれたデザインです。

しかしそうした豪華な着物も、明暦3年(1657)の大火により街もろとも丸焼けになってしまうのです。復興で町人が力をつけ始め、江戸中期になると、上方主導で繊細で華麗な呉服が江戸に下ってきます。友禅染の登場です。パステル調の中間色も入った多彩な色遣いが増えてきます。

この時期は帯にも大革命が起こりました。帯幅が広くなったことです。また昼夜帯といって、表裏が別々の布でできて使い分けができる帯が流行しました。帯芯が入っていないのでソフトで体にフィットし動きやすい物です。また歌舞伎役者が考案した吉弥結びや水木結びが大ヒットしました。今日の私の帯が昼夜帯で、結びが吉弥結びです。

江戸後期になると、幕府の度重なる厳しい贅沢禁止令にも負けず、逆に地味ですがおしゃれな着物や着こなしが増えていきます。着物は長くひきずるようになり帯は広くなり今と同じくらいの太さになりました。今は二つに折って締めますが、当時は幅広いままで着ていました。この頃の三大スタイルは無地、縞、裾模様で、それぞれ多種多様なスタイリングがされています。無地は「四十八茶百鼠」といわれるように微妙な色の違いがあり、自然からの名前がつけられました。

女性の髪形においても、平安時代から続いた下げ髪が、この時代に初めてアップにし“結い髪”が登場します。

私は、最近江戸時代の衣装や風俗についてビジュアルで解説した本を出版しました。

『江戸衣装図鑑』（東京堂出版）

『お江戸の結婚』（三省堂）です。

こちらも合わせてご覧になって、思いをはせていただければと思います。

【記録】文・写真：広報部会・深尾恵美子

江戸東京博物館友の会　見学会（2011/10/16）

「富岡製糸場および周辺見学」（バスツアー）

出発する直前まで降っていた雨も上がり、３台のバスに分乗した112人は群馬県富岡市にある世界遺産登録を目指す「富岡製糸場」へ出発しました。

「富岡製糸場」へ

世界遺産暫定リストに記載された日曜日の「富岡製糸場」は混み合っていました。

ヨーロッパの先駆的な技術を持つ当時世界最大規模を誇った「富岡製糸場」は全国初の官営模範製糸場として明治５年(1872)富岡に創設されました。

門を入ると目の前に東繭(まゆ)倉庫の通用門のアーチ『明治五年』のキーストーンが出迎えてくれました。その当時「木骨レンガ造」で建てられた繰糸(そうし)場、東繭倉庫、西繭倉庫、女工館（フランス人女教師達の住居)、検査人館(フランス人技師達の住居)、首長館(指導者ブリュナ邸）がほぼ当時の姿のまま保存されており、100mを超す繰糸場の建物の中まで見学して明治日本の近代産業のシンボル「富岡製糸場」のおもかげを垣間見ることができました。

▲富岡製糸場の倉庫前

城下町小幡散策

こんにゃくとねぎで有名な下仁田で昼食をとり、午後は江戸時代小幡藩２万石の城下町であった甘楽(かんら)町小幡を散策しました。小幡は元和元年(1615)織田信長の二男信雄(のぶかつ)の所領となり、以来約150年間、織田家によって治められました。織田宗家七代の墓が宗福寺の旧境内にあり、初代信雄から七代信富までの墓が並んでいました。ガイドさんの案内で、その後の領主松平家の城下町小幡の石積みや白壁の武家屋敷が残る「中小路」を歩き、武家屋敷「高橋家」の庭、「喰い違い郭」の石積み、「松平家大奥」を見学しました。「御殿通り」を歩いて、復元された藩邸・陣屋の跡と大名庭園がある国指定文化財名勝「楽山園」を見学しました。当時は藩主の許可が無いと入れない大名庭園「楽山園」は織田家によって造られ、江戸時代初期の池泉回遊式の庭園の原形がよく残されています。周辺の山まで借景に利用した広大な庭園には広い池に島や滝を配し、築山には茶屋も二つ建てられ、往時の格調の高さがしのばれました。隣の「長岡今朝吉記念ギャラリー」で休憩しながら、小幡藩陣屋内模型の説明を聞き、城下町小幡を実感しました。

▲小幡藩邸「楽山園」の腰掛茶屋

天候に恵まれ暑いくらい強い日差しの中､江戸と明治を満喫した一日でした。

【記録】文：広報部会・佐藤美代子
写真：同・国定美津子

江戸博クリップ

「ベランダの愉しみ」

司　書　楯石もも子

マンション５階のベランダに蜜柑の木が２鉢ある。どちらも食後に残った種を蒔いたものだが、ひょろひょろと芽を出し、今では３歳児ほどの背丈に育っている。

昨年の秋。蜜柑の葉にたくさんの小さな黒い虫がついていた。翌朝のぞくと、それらは少し大きくなり、ぼこぼことした形態に変化している。そして、あれよという間に額にぐるぐる模様の入った青虫に成長した。青虫は旺盛な食欲で葉を食べる。むしゃむしゃと､音が聞こえるような勢いで。毎朝眺めているうちに愛着がわいてきて､「アオくん」と呼び家族で見守った。鳥がついばみに来るのだろうか。アオくんたちは１匹、１匹と姿を消し、葉をむさぼり喰われた蜜柑の枝がさびしくなってきた頃、葉陰に薄緑色のサナギがひとつ残った。ひと筋の細い糸をぴんと張り、絶妙のバランスで枝につながっている。サナギは枯葉色に変わり、そのまま冬を迎えた。

今年は春が来るのが遅かった気がする。３月の東日本大震災以降、余震も続いていたし、被災地への思いや節電、放射能など先のわからない不安で、都内で暮らす者にも重苦しい空気がのしかかっていた。そんな４月、雨上がりの日曜の朝にサナギが蝶へと羽化した。しわしわの羽をそっと拡げながら、蜜柑の枝にじっとつかまる。黒地にクリーム色の地紋、小さく入った水色と橙色の斑点も鮮やかなアゲハ蝶だ。足元を心もとなげにただよってから、風にのってひらりとベランダの柵を越えていった。柵の向こうには富士山が見えて、こわばっていた肩がふっと軽くなったような気がした。

２週間後、蜜柑の木にはまたアゲハがやってきて、数日後にはたくさんの黒い虫が現れた。成長した青虫は思わぬ場所まで移動してサナギになり、初夏から夏にかけて２頭の蝶が飛び立った。今年は冬越しのサナギは見当たらないが、蜜柑は青い葉を繁らせている。来年も蝶が来るかな、来るといいなあと、春を楽しみに待っている。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員、専門研究員、司書など館職員の方に執筆をお願いしています

江戸東京博物館友の会　見学会（2011/11/27）

「広重『名所江戸百景』周辺探訪 ―その5（本所深川・大川端周辺）―」

百景めぐりは５回目。今回は隅田川周辺で描かれた５枚の絵の場所をたずねます。私は近所に住んでいますが、まじめに回ってみると意外な新発見がたくさんありました。当日は 162 人が参加し 17 班に分かれて回向院から清澄庭園まで歩きました。早く終わった班ではハゼの紅葉が見頃になった清澄庭園の散策を楽しまれた方も多かったようです。

回向院から御船蔵跡

JR「両国」駅からまず回向院へ向かいます。回向院は明暦の大火の犠牲者を弔うために建てられました。現在の建物はコンクリートの味気ないものですが、境内には多くの供養塔と墓碑があり、鼠小僧次郎吉のお墓では前立てを削っている人達が大勢いました。境内の脇から抜けて元の回向院正門跡に出ます。「両ごく回向院元柳橋」絵は回向院から薬研堀にかかる元柳橋方面を描いています。境内では相撲興行が行われていたのですね。この正門跡から隅田川方面に向かっている道は昔の参道です。両国橋は今よりも60m下流にあったので、浅草見附の方から渡って真ん中辺りにくると回向院がそびえ立って見えたのではないでしょうか。

京葉道路に出て両国橋に向かいます。「浅草川大川端宮戸川」絵は両国橋から浅草方面を描いていますが、主題は大山参りに向かう人々の様子だそうです。東詰から下流に少し行くとその人々が身を清める水垢離（みずごり）場があり、今は「石尊垢離場跡」という説明板が立っています。そこから竪川にかかる一之橋を経て、途中にある江島杉山神社を見学。江島は江ノ島の弁財天、杉山は盲目の鍼灸師（しんきゅうし）杉山検校のことです。境内には弁財天が鎮座するあやしげな雰囲気の岩窟があり、夏はヤブ蚊の襲来に悩まされそう。

▲回向院門前

江島杉山神社の辺りから現在の新大橋東詰の辺りまでは御船蔵で、幕府の艦船を保管する倉庫が立ち並んでいたため、御船蔵前町と呼ばれました。

新大橋から深川萬年橋

御船蔵跡から少し先に隅田川テラスへの降り口があります。川風に吹かれながら新大橋の下をくぐり、また上に上がって橋の東詰にある小さな公園で新大橋の由来を聞きます。ここには明治の鉄橋の橋灯を冠した親柱がモニュメントとして立っており、橋中央のオレンジ色が印象的な主塔には広重の「大はしあたけの夕立」絵と、明治の鉄橋のレリーフが刻まれています。さて、橋を渡って「大はしあたけの夕立」絵の描写場所へ向かいます。隅田川テラスには何カ所か出入りする階段がありますが、日本橋消防署の消防艇が係留されている場所のすぐ先の階段を上がったところから眺めると、ちょうど広重の絵に重なります。雨に煙る対岸は幕府の軍艦「安宅丸」が係留されていたため一帯を「あたけ」と呼んでいました。

▲「大はしあたけの夕立」絵の描写場所

▲「深川萬年橋」絵の描写場所

さらにテラスを歩いて清洲橋を渡り、萬年橋に向かいます。「深川萬年橋」絵はどういう構図なのか分かりにくいですが、橋の欄干と、カメをつるした手桶（おけ）の枠を組み合わせています。昔は富士山も見えたのでしょうが、今ここからの風景として美しいのは清洲橋の眺めでしょうか。

芭蕉稲荷から久世大和守下屋敷跡（清澄庭園）

萬年橋を渡ってすぐに左折すると右側に赤い幟（のぼり）が立ち並んでいます。芭蕉稲荷です。大正６年(1917)の津波襲来のあと芭蕉愛好の石蛙がこの地で発見され稲荷神社が建てられました。以来、芭蕉翁古池の跡として東京都指定旧跡になっています。すぐ先には芭蕉記念館の分館となる芭蕉史跡庭園があり、芭蕉庵のレリーフや芭蕉翁の像が立っています。昔は今の清洲橋西詰め辺りを中心に中洲が広がって、月見や納涼の名所でした。ここを描いた「みつまたわかれの淵」絵のみつまたは、箱崎川が埋め立てられて中洲もない今となっては想像するしかありません。描写場所としては史跡庭園から見た隅田川の辺りでしょう。

最後は霊厳寺で松平定信のお墓と江戸六地蔵にお参りし、久世大和守下屋敷跡である清澄庭園で解散となりました。

【取材】文・写真：中村貞子(広報部会)

サークルだより

◎活動概況

◆落語と講談を楽しむ会：10月18日(火)世話人・山内啓巳さんの司会で、1年間の総括と向う1年間の計画について話し合った。月例の活動報告、会計報告が了承され、新世話人に小山一成さん・鈴木紘一さんが選ばれた。そして希望・提案をもとに今後1年間各月の活動予定と月番を決めた。参加者19人。11月20日(日)月番・山内啓巳さんの所属する「楽笑会」の発表会を江東区総合区民センターで鑑賞した。太尾亭狸久（山内さん）はじめ、極楽亭立往生、酔っ亭よろしくなどユニークな芸名の皆さんの日頃の精進の結果を一同で楽しんだ。参加者17人。

◆藩史研究会：10月14日(金)国定美津子さんが、肥前国島原藩について研究発表を行った。現地に足を運んだ上、豊富な資料で、有名な島原の乱をはじめ島原藩の歴史の詳しい説明があり、今回初めて知ることも多かった。参加者は25人。11月11日(金)向井晃さんが、駿府静岡藩について研究発表を行った。明治元年(1868)から明治4年(1871)までわずか3年2カ月しか存在しなかった藩の歴史と徳川家達（いえさと）の生涯とを重ね合わせた発表で、一同の興味を引いた。参加者20人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会：10月13日(木)、28日(金)、11月10日(木)、25日(金)に例会を開催。参加者は各10、7、7、7人。

◆神田川を歩き楽しむ会：10月23日(日)と27日(木)に第22回として、豊橋から江戸川橋まで神田川沿いに歩いた。途中、豊川稲荷、新江戸川公園、和敬塾、水神社、関口芭蕉庵、椿山荘、講談社野間記念館、東京カテドラル関口教会、幸神社、大洗堰（せき）跡などを参拝あるいは見学した。参加者は各29人、48人。11月20日(日)と24日(木)に第23回として、江戸川橋から白鳥橋まで神田川沿いに歩いた。途中、関口正八幡神社、関口台公園、鳩山会館、今宮神社、神田上水跡、小日向神社、国産飛行機発祥の地、徳川慶喜公屋敷跡・同終焉（しゅうえん）の地、印刷博物館、同人社跡などを参拝あるいは見学した。参加者は各35人、43人。

◆『江戸名所図会』輪読会：10月17日(月)末永俊幸さんの担当で、品川の東海禅寺を読み、活発な議論を行った。参加者19人。11月28日(月)柴田孝さんの担当で、品川宿の問答河岸から常行三昧寺を読み、本文の正誤をただすなどの指摘もあり、活発な討論が行なわれた。参加者19人。

❖　　❖　　❖

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください（ただし、輪読系の2サークルと「落語と講談を楽しむ会」については現在満員のため欠員が出たときに先着順で参加していただくことになります）。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

会議・会合日誌

2011／10～2011／11

◆役員会

10月11日(火)14時開催。国立歴史民俗博物館友の会と情報交換した結果について報告があった。また上半期の会計報告があり、特に問題はなかった。11月8日(火)14時開催。外部からの依頼事項について会員に興味、メリットがあるものは積極的に受け入れることとした。個人情報の保護管理について検討チームを立ち上げることにした。

◆事業部会

10月4日(火)16時開催。役員会の報告、9月の事業報告および今後の事業計画を確認した。セミナー講師の推薦用紙のフォーマットを作成した。出席者21人。

11月1日(火)16時開催。10月の事業報告があり、特にバスツアーの当日不参加者への対応を検討した。11月の事業計画を確認。来年度セミナーの講師推薦が3件あり、いずれも承認された。出席者22人。

◆広報部会

10月21日(金)14時開催。役員会報告、『えど友』64号進行状況、65号の新春特集の企画を確認した。新ホームページ担当者の紹介があった。広報部会マニュアル「初心者用処理手順書」が確定した。出席者10人。

11月18日(金)14時開催。役員会報告、『えど友』65号の進行の確認をした。えど友誌面見直しチームからアンケート調査の結果報告、誌面刷新の方向性の説明があった。広報部会マニュアルの内容を精査した。出席者11人。

◆総務部会

10月25日(火)13時開催。『えど友』64号ほかチラシなど5点の発送業務を行った。役員会報告、今後の活動の日程、内容および担当者の確認を行った。出席者20人。

11月22日(火)13時開催。役員会報告、各事業手伝いの際の留意事項を確認した。発送業務はなし。出席者9人。

◆文政町方書上翻刻 プロジェクト

A、Bグループとも10月6日(木)、20日(木)、11月3日(木)、17日(木)に例会開催。出席者は(A)各9、9、(11月3日は休み)、9人、(B)各10、9、10、10人。

えど友プラザ

～友の会会員の投稿欄～

今に生きる町火消

早川良躬

江戸博前庭、竜の子贔屭の背上に立つ徳川家康像は、社団法人江戸消防記念会の寄贈によります。消防出初め式の木遣、梯子乗りでおなじみですが、町火消の文化伝統保存を目的に、その子孫が結成した会です。昨年の震災時、ふと頭をよぎったのは同会の先祖のことでした。

江戸の華、火事は大火だけで49件。しかし、歴代将軍の中で火事に心を費やしたのは三田村鳶魚によると吉宗のみです。彼の下で南町奉行大岡忠相は、町場防火の抜本策として、朱引きした地区毎に町方の費用で町火消を設置するよう名主に命じました［享保3年(1718)］。

以後曲折はありますが、町火消を防火の中心に置こうとする幕府の政策は江戸城火災時の鮮やかな活躍など、江戸の消火に町火消が不可欠な状況を生み、それが武家火消に対する町火消の優越感と気負いを育んだという池上彰彦の考察（『江戸火消制度の成立と展開』要旨）、また、吉田伸之の、江戸町人の第一の御役を代替するという町方鳶の「矜持」が、身命を懸けることもいとわない自己犠牲的な勇気へと昇華していく（『近世の身分意識と職分観念』要旨）との評価につながるようです。それは彼らの粋、勇み、達引の源泉でもあったでしょう。

見方を変えれば、民の安全確保は政府最大の責務。それを民が自給で完遂、公費で賄う務めまで代行した、公以上の公と言えるでしょう。

明治5年(1872)、町火消は官設の「消防組」に改組。入組した町火消は昔どおりの役名で非常勤の公務員。巡査屯所に昼夜交代で詰め、すわ出火と聞けば半纏に纏、梯子を押し立て出動。薄給に動ぜず、「務めは重し、身は軽し。己れをころし、公に尽くす」は町火消魂そのもの。けんかは厳禁でも火事場の働きには各町の名誉がかかり、「纏、負けてくるな、頭、しっかりせよ」となります。関東大震災ではそれこそ町火消と町鳶の二役を存分にこなしたでしょう。その消防組も昭和14年(1939)、警防団設立により廃止。同年発足したのが江戸消防記念会です。町火消の職制に従い、正会員は正副組頭と小頭、準会員は筒先と道具持。組頭には新門辰五郎の後裔もおられます。「義理と人情とやせ我慢」「奉仕と祖先崇拝」「序列の尊重」は、記念会のいわば心の柱、数々の行事・技芸は、命を的に築き上げた町火消220年の歴史と上記精神のほとばしりではないでしょうか。

言わず語らず、こう私に教示下さったのが、東京都鳶工業会前専務理事、町火消創設時から十四代、第一区五番組（も組）組頭、木遣師でもある中村達太郎氏。氏は私が鳶職の国家技能検定に携わった時、大変協力、親交いただいた人で、一見シャイながら町鳶、町火消の気骨と情感を内に秘めた粋人です。

今回の大震災は、私たちが見失いかけた義理人情、忍耐、奉仕と助け合いといった人間の基本を呼びさましました。また、壊滅した原発の渦中に突き進んでいく東京消防庁の隊員の皆さんに、往時の町火消を垣間見る気がしました。どうやら町火消は、今も私たちの町に生きているようです。

斗南藩の人々

片子澤宏

「北斗以南皆帝州」という漢詩から採ったといわれる斗南藩があった。現在の青森県下北・五戸・三戸および岩手県の二戸郡のあたりであり、私の生誕地南部八戸の隣地である。新政府軍は、戊辰戦争で敗退した会津藩を挙藩流罪の形で荒蕪の地に追いやった。極寒不毛の地で多くの餓死者が出たなか、藩経営にあたった三人の維新後の生き方について考えたい。

一人目は大参事山川浩である。彼はこの「朝敵」の汚名を返上し、会津人が青天白日の身になって自由に職に就けるように道を開くことで責任を取ろうとした。彼は結局陸軍に入り、やがて、陸軍少将・男爵となり、その間に『会津守護職始末』を書いた。その弟健次郎は東大・京大・九大の総長を務め、兄の遺志を継ぐ。さらに、妹捨松(大山巌の妻）は、津田梅子と津田塾を開き我国の女子教育の発展に貢献した。

二人目は小参事の永岡久茂である。南部八戸には次のような話が伝わっている。明治4年(1871)廃藩置県の際、東京にいた旧藩主容保があいさつに来た。「余は東京に召され、永く汝等と艱難辛苦を共にすることができなくなった…」とのべ、各地を回り慰労した。会津人たちは容保の後を追い、帰京する容保を見送り、皆、地に座り込み慟哭した。涙なしでは見られない光景であったという。これを最も深刻に受け止めたのが永岡だと、私には思われる。彼は、前原一誠の「萩の乱」に呼応し武装蜂起したが、身内の密告で失敗に終わり、この時に受けた傷がもとで獄死した。皆、心のなかで彼の行為に喝さいをおくり、身内の裏切りを憎んだ。

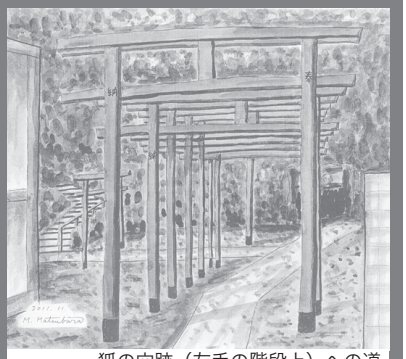
三人目は小参事広沢安任である。彼は、あくまでも斗南に残り、開拓の夢の実現に努力を続けた。この不毛の地を開拓し、日本初の洋式牧場・農場を造り、その経営に成功し、青森県の酪農界の先駆者になり多大な貢献をした。現在、この地は、「三沢斗南藩記念観光村」となり、この中に「先人記念館」がある。南部藩の人々が広沢の名前を永遠に残してくれた。

以上、三人三様の生き方であったが、私みたいに怠惰な生活をしている者には、発する言葉は見つからない。恭順しているのに戦をしかけ、戦死者の埋葬も許さなかった新政府軍の処置は永く会津に怨念を残すことになった。

落語で

江戸散歩…㉔

［王子の狐］



狐の穴跡（左手の階段上）への道

王子の狐

ある男が王子で狐が若い娘に化けるところを目撃して、化かされたふりをして狐をだましてやろうと思いつきます。そこで声をかけ、近くの料理屋へ誘い、さんざん飲み食いしたあげく、酔いつぶれた娘を残して先に帰ってしまいます。起こされた娘は勘定が自分持ちと聞いてびっくり、尻尾（しっぽ）を出してほうほうのていで逃げ帰ります。狐をだますと怖いと聞かされた男は翌日ぼた餅を持って、狐のところにわびに行きます。子狐がぼた餅を喜ぶと、母狐が「食べるんじゃない、馬の糞（ふん）かもしれない」で下げとなります。皆さんよくご存知の落語です。

ではその舞台を歩いてみましょう。出発はJR「王子」駅からですが、この駅には改札が3カ所あります。そのうちの北口から出て、北本通りを左へ数分歩き、せともの屋のところを右折するとすぐ装束稲荷神社という小さな神社があります。ここは関東8カ国の稲荷の使いの狐が王子稲荷へお参りする前に装束を着替えたという言い伝えがあるところです。今でもそれを

▲装束稲荷神社

模した「狐の行列」が毎年大晦日に行われています。詳しくは本誌63号8頁に友の会会員の林義之さんが書いておられますので、ご参照ください。

とまずここへ来たのは、狐が装束を着替えた場所なので、もしかしたら落語の狐もここで若い娘に化けたのではないか、という気がしたからです。そんな気分を味わいながらお参りを済ませたら、また駅へ戻りましょう。

飲み食いの舞台・扇屋と王子稲荷

「王子」駅北口そばの「森の下ガード」をくぐり、音無親水公園の方へ行くとすぐ左側にある大きなビルが扇屋ビルです。この扇屋が「王子の狐」で男と若い娘（狐）が飲み食いした料理屋とされています。しかし今は料理屋を閉め、一角に玉子焼きの販売コーナーがあるのみです。この玉子焼きは扇屋の名物で、日本橋のデパートでも販売しているそうです。

その玉子焼きを買ったときにいただいた「王子扇屋の沿革」によると、創業は慶安元年(1648)、当代で十五代、

▲名物「厚焼玉子」を売る扇屋

『江戸名所図会』にも載り、蜀山人も「いざあけんゑびや扇屋とざすとも王子の狐かぎをくわえて」とよんでいます。「江戸時代一流会席番附」にも八百善などと一緒に載っていて、『寝ぬ夜のすさび』という古書には「料理屋の折詰は扇屋より始まれり」と書いてあるそうです。落語の方の男は飲み食いしたあげくにお土産に玉子焼きの折詰まで持っていったことになっています。私も数十年前、まだ料理屋だった扇屋へ宴会の予約に行き、ご予算が合わず？断念したことがあります。

さて、扇屋から出て森下通り商店街を進みます。ちょっと横に入ると狐の向うを張った「狸」という居酒屋があって笑わせます。右手に名代「久寿餅（くずもち）」

▲王子稲荷の「狐の穴跡」

の店があり、さらに進むと左手に王子稲荷神社があります。参拝は「ウィークデーはいなり坂より」と表示されていて手前の坂を上り、脇から入ります。境内で幼稚園をやっているためですが、その脇の方も園児出迎えの若いママたちに占拠されていました。本殿の奥の方に「狐の穴跡」というのがあって、ここが落語でいう狐の住み家かなと思いました。落語の舞台はこれで終わりですが、せっかくですので、もう少し歩いてみます。

名主の滝公園から紅葉寺へ

王子稲荷を出て道なりに行くと間もなく名主の滝公園です。王子村の名主・畑野孫八が自邸に開いた江戸情緒あふれる庭園で、かなり広くゆっくり楽しめます。公園を出たら、公園に沿って外をまわり、三平坂を上りそのまま進むと本郷通りに出ます。これを横断してさらに進むと北区立中央図書館に突き当たるので左折して行くと紅葉橋に出ます。紅葉寺といわれる金剛寺、源頼朝の布陣伝承地などを見て、下流に向かって右岸を歩きます。

ほどなく音無さくら緑地があり、ここでは緑の吊橋を楽しめます。そして正受院に寄り、山門の先の「不動の滝跡」の説明板を見て左へ行くと独立行政法人・酒類総合研究所に突き当たります。以前の国税庁醸造試験所の一部で、レンガ造りの醸造工場なども残っています。私も仕事柄縁のあったところでなつかしく見ました。隣の醸造試験所跡地公園を抜け、音無橋から河畔に下りると音無親水公園で扇屋のところに戻ります。ここには何軒もの飲み屋がありますが、狐にだまされないうちに帰った方がよさそうです。

【取材】歩いた人(文・写真・イラスト)：
広報部会・松原良

催事案内

古文書講座

第３期の日程

古文書講座の今年度第３期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編

- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教／近世の門跡寺院を中核とした朝廷史・仏教史・文化史を研究)
- 開催日：1/11(水)、2/1(水)、3/7(水)

◆初級編

- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻／幕府職制や幕藩関係、特に将軍姫君の婚礼や付人役人などを研究)
- 開催日：1/18(水)、2/15(水)、3/21(水)

◆中級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻／近世政治史、主として近世朝幕関係、近世公家社会を研究)
- 開催日：1/21(土)、2/18(土)、3/17(土)

- 時間：各講座とも　A 講座は 10：30 ～ 12：30
  P 講座は 14：00 ～ 16：00
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室又は学習室 1、2
- 参加費：各講座とも全３回 1,500 円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展
「ザ・タワー～都市と塔のものがたり～」

◆江戸博がある墨田区に、自立式鉄塔としては世界一の高さとなるスカイツリーが建設中です。この塔は墨東の空にどのような景観をもたらすのでしょうか。こうした都市に建つさまざまな塔の歴史を追い、特に 19 世紀から 20 世紀初頭のパリ、東京、大阪の３つの都市に建ったタワーを中心に、都市と塔のものがたりを紹介する特別展です。担当の岩城紀子学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：２月 24 日(金)17 時～ 19 時
- 申込締切：２月 13 日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／企画展示室
- 定員：200 人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 700 円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第 113 回「増上寺徳川家霊廟の世界」

講師　高山優さん(港区教育委員会事務局学芸員)

◆昭和 20 年(1945)、東京芝を襲った空襲により、わが国を代表する荘厳な建造物群を構成する多くの建物が灰と化しました。この建造物群こそ、芝増上寺に造営された徳川将軍家の霊廟(れいびょう)です。増上寺には、江戸幕府第二代将軍徳川秀忠をはじめとする３名の将軍霊廟が造営されました。いずれも時の将軍、幕府が威信をかけた大事業でしたが、とりわけ寛永９年(1632)につくられた秀忠 - 台徳院 - 霊廟は、江戸史を考える上で重要な位置にあると考えられています。今回は、増上寺徳川将軍霊廟造営の経過や霊廟の構造、また江戸・東京史における霊廟の意義についてお話しいただきます。

○講師略歴：たかやま・まさる
昭和 29 年(1954)生。明治大学文学部卒業、慶應義塾大学大学院文学研究科修了。昭和 57 年(1982)より、港区教育委員会事務局学芸員。主として考古学の視点から近世・近現代史の調査・研究に従事。著書は『港区考古学ブックレット３　台徳院霊廟跡の考古学–増上寺寺域第２遺跡とその周辺–』(港区教育委員会刊)など。

- 開催日時：１月 28 日(土)14 時～ 15 時 30 分
- 申込締切：１月 19 日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200 人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

第 114 回「後藤新平をめぐる男たち　江戸博所蔵資料を中心に」

講師　松井かおるさん(江戸博学芸員)

◆関東大震災直後、帝都復興院総裁として帝都復興の先頭に立った後藤新平。後藤が医師から内務省衛生局に転じたころ同僚だった永井久一郎(永井荷風の父)、鉄道院総裁時代以来帝都復興院総裁時代まで部下として仕えた大内亥之吉、震災復興橋梁の建設を主導した太田圓三(木下杢太郎の兄)、復興公園建設技師・星野奇。当館所蔵の文書資料から、後藤新平の生涯と各時代に関わった人々やエピソードについてお話しいただきます。

○講師略歴：まつい・かおる
東京都生まれ。南山大学文学部人類学科卒業。昭和 62 年(1987)から学芸員として江戸東京博物館準備業務に就く。開館時の常設展示のうち、関東大震災、モダン東京、空襲と都民、よみがえる東京を担当。以後、特別展「東京大空襲　戦時下の市民生活」「掘り出された都市」、企画展「エノケンとレビューの時代」「後藤新平」など幅広く担当。共著に『エノケンと〈東京喜劇〉の黄金時代』(論創社)など。

- 開催日時：２月 25 日(土)14 時～ 15 時 30 分
- 申込締切：２月 16 日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200 人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員 500 円・同伴者 600 円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

お申込方法

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく!

◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。**「往復はがき」の必要はありません。**
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10 時〜12 時、13 時〜17 時)**にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

『江戸町火消纏錦』より　［中村達太郎さん提供
(＝９頁「今に生きる江戸町火消」参照)］

会員優待のお知らせ

●ＮＨＫ大河ドラマ50年特別展「平 清盛」

会　期　1月2日(月)〜2月5日(日)
休館日：1月23日(月)、30日(月)
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。

次回予告

●特別展
「ザ・タワー〜都市と塔のものがたり〜」

会　期　2月21日(火)〜5月6日(日)
休館日：毎週月曜日、ただし4月30日は開館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。

企画展のご案内

好評開催中！

●企画展
「絵で楽しむ忠臣蔵」展/「歴史の中の龍」展

会　期　平成23年12月3日(土)〜24年1月29日(日)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

次回予告

●企画展
「芝増上寺　秀忠とお江のお寺」展

会　期　3月27日(火)〜5月27日(日)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

原稿を募集します！

会員の投稿欄「えど友プラザ」の原稿を募集しています。戦前戦後の思い出、名所めぐりの感想、趣味や所属サークルのできごと、あるいは東京や江戸に関することなどを 1000 字程度にまとめて事務局宛お送りください。字数が多い場合など調整することがあります。また、誌面に彩りを添えるカット(イラスト)も募集しています。はがきに墨書きで事務局宛お送りください。いずれも採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿は未発表のご自身のものに限ります。また原稿はお返ししません。

お 知 ら せ
(会員割引のご利用を!)

江戸博のミュージアムショップやレストランでは友の会の会員証を提示することによって割引が受けられます。ただし、書籍を除きますが、ほかに細かい条件がつくことがあります。

店頭での表示や告知はありませんので、自分の方から会員証を提示して割引を受け、“えど友ライフ”をお楽しみください。

会報＜えど友＞第 65 号
平成 24 年 1 月 1 日発行（奇数月 1 日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、中村貞子、佐藤美代子、国定美津子、天野哲夫、平林美幸、前田太門
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910